ISSN 0917−4729

北海道立北方民族博物館 Hokkaido Museum of Northern Peoples

H4.35.2（左）／H4.35.5（右）

スキン・スクレイパー(イヌイト)

長さ　左：7.4cm　　右：9.1cm

幅　　左：3.5cm　　右：3.8cm

北方民族博物館だより
−48号−

第17回北方民族文化シンポジウム　2

講演会　アイヌ文化への展望　5

写真展　渡鴉<ワタリガラス>のアーチ　6

ミュージアム子どもフェスタ「やってみる・モンゴル」　7

講座　大草原の小さなゲル　8

お知らせ・表紙・記事　9

ニュース　10

第17回北方民族文化シンポジウム

北太平洋沿岸の文化ー資源利用のあり方ー

平成14年10月19日(土)・20日(日)　於オホーツク・文化交流センター

第17回北方民族文化シンポジウムでは、「北太平洋沿岸の文化ー資源利用のあり方」をテーマに各地域における生物資源利用のあり方を検討しました。以下にその概要を報告します。

第1部 アラスカにおける資源利用ー沿岸と内陸ー

座長：岡田　淳子（北海道東海大学）

■井上敏昭（城西国際大学）

リアルフードとカリブースキンジャケットー内陸アラスカ先住民グイッチン社会における生物資源の今日的重要性ー

グイッチンはアラスカ州内陸部からカナダ北西準州やユーコン準州を生活領域とするアサバスカ系先住民の1グループである。食料や生活消費財を入手するために、季節的な移動を繰り返しながら春のマスクラット（ジャコウネズミ）猟や淡水魚漁、夏のサケ漁、冬のヘラジカ猟などを行い、自給自足の生活をしてきた。18世紀後半以降にヨーロッパ人と接触して以来、ヨーロッパの物質文化が流入し、外来の商品を購入するために現在では現金収入が必要となっている。

グイッチンは現在においても、現金を得るための都市部での労働よりも従来の伝統的な狩猟・漁撈（ろう）・採集活動を、自らの文化の根幹を支える生業活動として重視している。狩猟・漁撈・採集によって得た食料は「リアル・フード」とされ、無償分配することでグイッチン社会内部での連帯関係を維持している。また、カリブーなど捕獲動物の皮革を使って作成したスキンジャケットやモカシンを、自らのアイデンティティを誇示することに役立てている。

■ディビッド R. イェスナー（アラスカ大学アンカレッジ校）

貝類、アザラシそしてサケー北太平洋の海洋適応に関する動物考古学的展望ー

北太平洋沿岸地域では数千年前から海棲（せい）生物を資源として利用してきた。その痕（こん）跡は海棲動物の骨や貝が堆積した貝塚や海獣類あるいは魚類の捕獲道具である骨製の回転式、または逆刺付銛（もり）頭の出土にあらわれている。これらの遺物の年代は日本列島では縄文文化期（9500年前）、ロシア極東地域ではルドナヤ文化期（8000年前）にまで遡（さかのぼ）ることができる。

一方、アラスカ半島からアリューシャン列島にいたる南西アラスカの太平洋沿岸地域におけるオーシャンベイ・タクリ文化（6500年前）でも逆刺付き銛頭やアザラシ類、トドの骨が出土しており、海洋に適応していたと考えられる。

このように、北太平洋地域全体を通じて海洋に適応していったのは、当時の気候に影響された結果であると考えられる。当時の気候は温暖期にあたり海の領域が拡大し、人口も各地で増大した。それによって陸地での狩猟、採集だけでなく海岸部での狩猟、漁撈も行われるようになったと考えられる。

第2部チュコトカ・カムチャツカにおける資源利用

座長：荻原　眞子（千葉大学）

■池谷　和信（国立民族学博物館）

トナカイ牧畜からサケ漁業へー危機に対するチュクチの対応ー

チュクチはロシア北東部のチュコト半島で生活

してきた先住民である。19世紀の後半には、「トナカイ・チュクチ」がトナカイの飼育を、「海獣チュクチ」が海獣狩猟を主な生業として生活していた。現在では双方ともに国営農場で働く公務員としての立場にある者が多い。

チュクチが居住するチュコトカ自治管区内でのトナカイ飼育頭数の変化を見ると、1950年代以降のソビエト時代には、個人所有のトナカイ飼育頭数は減少し、反対に国営農場所有の飼育頭数は増加している。しかし、1985年から1990年には飼育頭数が激減し、飼育頭数ゼロという地域もでてきた。この原因は社会主義体制崩壊後の市場経済に対応できなかったためであるといえる。

現在トナカイ飼育頭数の減少により、伝統的な生業であるトナカイ飼育に頼ることができなくなった地域では、トナカイ飼育からサケ漁業に生業を転換するなど、資源利用の多様化を模索している。

■ニコライ　クレンケ
（ロシア科学アカデミー考古学研究所）
カムチャツカ北西沿岸における先住民の伝統的資源管理と集落構成

カムチャツカ半島のカブラン地域を中心に、先住民の生業活動の変遷と集落の立地の変化について報告する。

カブラン川沿いに下流へと踏査すると、カブラン川の河口付近および、河口より約1km内陸に入ったところに、各々30軒以上の住居址を発見した。放射性炭素14年代法によると双方とも年代はほぼ同じで500年前に使用されていたことがわかる。河口付近の遺跡から出土する遺物は海獣類や魚類の骨が多く、内陸部の遺物では陸獣の骨が多い傾向にあった。従って、当時より集落の立地条件によって、生業に違いがあったということがわかる。

18世紀以降、先住民は帝政ロシアの時代、ソ連邦の時代、そしてロシアの時代において、生業および集落の立地の変化を余儀なくされた。帝政ロシアの時代は毛皮税を納税するために陸獣を求めて内陸部に集落を構えるようになり、ソビエトの時代には強制的に海岸部に位置する魚の加工場で働かされるようになり、集落も海岸部に移動する。

そして現在、ロシアの時代において、先住民は再び伝統的な狩猟、漁撈、採集によって生計を立てざるを得ない者が増加している。

（学芸課　角　達之助）

第3部「海洋資源の利用
—捕鯨文化と千島列島文化—」
座長：岩崎 グッドマン まさみ（北海学園大学）
■浜口尚（園田学園女子短期大学部）
「北極圏地域における先住民生存捕鯨
—アラスカとチュコトカの事例より—」

今年のIWC（国際捕鯨委員会）年次会議で、2003年以降のアラスカとチュコトカの先住民の捕鯨について、コククジラの捕獲は認められたものの資源量が少ないとされるホッキョククジラ捕獲割当要求は否決された。しかし、本発表の数日前に開催された特別会合で修正案が承認され、ホッキョククジラの捕獲が合意されたところである。

捕鯨は共同体全体の活動であり、捕獲法や分配・消費は定められたルールに則って行なわれ、人びとに食料を供給するものであった。外部の圧力により、捕獲の制限や方法の変化を余儀なくされることは、文化的伝統やアイデンティティ形成に大きな影響を与える。また、先住民の嗜好のうえでホッキョククジラとコククジラには優劣があり、異なる鯨種は滋養的には代替品になり得

ても、文化的・心理的には充足させられるものではない。両地域で伝統文化復興に重要な意義を持つホッキョククジラ捕鯨が継続され、日米をはじめとする捕鯨を巡る対立が終焉することを期待したい。

■手塚薫（北海道開拓記念館）

「千島列島におけるラッコ猟とグローバル経済」

江戸時代から千島中部のウルップ島は「ラッコ島」と呼ばれ、良質な毛皮を有するラッコが生息することで注目されていた。18世紀前半までラッコは松前藩の独占品であり、アイヌによってもたらされた毛皮は贈答用などに使われたとされているが、18世紀後半から19世紀初めの蝦夷地が幕府直轄であった時期には、クロテンに代わって、ラッコが中国向け輸出品として急増した。

ロシアも18世紀後半から千島に進出、ラッコ猟を始めたためにアイヌとの間で紛争も生じた。1828年には露米会社がウルップ島に殖民、ラッコ猟に長けたコディアック島の先住民を移住させ、大きな収益をあげた。

中国という巨大な消費地を背景に、日露の競合は先住民をグローバル化した経済システムに組み込んでいった。そして1830年代にはラッコが激減し、中国との交易は衰退するが、明治以降も千島のラッコ猟はしばしの間続き、これが北洋漁業の基礎になっていたことはあまり知られていない。

第4部「北太平洋の東と西
—北米北西沿岸と北海道の資源利用—」
座長：岩崎 グッドマン まさみ（北海学園大学）

■マドンナ　L.モス（オレゴン大学）

「北米北西沿岸における資源利用
—東南アラスカとオレゴンの調査から—」

東南アラスカのアディントン岬岩陰遺跡は約2000年前に利用されていたもので、現代のトリンギットの生活圏にあたる。この遺跡調査の目的の一つは、1979年に提唱された「トリンギットは外洋の環境と資源に十分に適応していなかった」とするラングドン説を検証することであったが、結果は春から夏にかけてマダラ、オットセイ、トド、ゼニガタアザラシ、サケ、オヒョウといった外洋性の資源も利用していたことが明らかである。

オレゴン州のネターツ湾遺跡は、北西沿岸文化最南部にあたるティラムークの人びとの生活圏に位置する。この遺跡の調査は、1700年に起きた大地震の前後で、生業が変化したかどうかを検証することであった。動物遺存体の調査結果によればラッコや海鳥の利用は減少し、ウミタナゴ類等の小魚とイガイ類など河口域の資源利用が増えているが、大幅な変化ではなかった。

これらの調査結果は、過去2000年の同地域における海獣類の生息状況の変化をも示すものであった。

■渡部裕（北海道立北方民族博物館）

「アイヌ文化における水産資源利用
—自家用と商品生産との関係—」

縄文文化期以降、北海道における生業は漁撈が大きな比重を占めてきた。なかでもシロザケとカラフトマスをはじめとするサケ科魚類は経済的に重要であった。時代や地域によって変異はあるものの、漁撈を中心とする生業はアイヌ文化期まで継承された。

アイヌ文化における水産資源利用には、自家用と商品生産の二つの目的があり、商品とされるものは、外部の需要によって、自家消費しない種が捕獲されたり、新たな加工方法が導入された。アイヌ自身が食料としないナマコや、塩蔵などである。これは、魚介類のみならず、アザラシなどの海獣類利用にもみられる。

商品生産はアイヌの生業における比重の変化ばかりでなく、食文化をはじめとする生活全体に影響を及ぼしたと考えられる。

（学芸課　齋藤　玲子）

講演会　平成14年10月29日（火）18:30―20:30　於オホーツク・文化交流センター

アイヌ文化への展望

講師　ウイリアム　W.　フィッツュー氏（スミソニアン研究機構・極北研究センター所長）
チューネル　M.　タクサミ氏
（ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館シベリア部門主任）

北太平洋沿岸の先住民文化とアイヌ文化との共通性について、2人の講師をお招きし、講演会を開催しました。以下に概要を報告します。

■ウイリアム　W.　フィッツュー氏

「ジェサップ北太平洋調査とアイヌ文化」

1897年から1902年にかけて、アメリカ自然史博物館は「ジェサップ北太平洋調査」と名付けた調査研究を行った。主な目的は北太平洋沿岸地域に住む先住民族の、「失われつつある」文化の調査、および資料の収集、保存にあった。

1992年、「ジェサップ調査」100周年を間近に控えて、ジェサップ調査を継承する研究プロジェクト「ジェサップ２」が発足した。同年、関連事業として「Crossroads of Continents : Cultures of Siberia and Alaska（両大陸の十字路ーシベリアとアラスカの文化ー）」と題する特別展が開催されたが、アイヌについては調査不足により触れられなかった。そして1999年、ついに「Ainu : Spirit of a Northern People（アイヌー北方民族の精神世界ー）」と題する特別展を開催することができた。

この特別展を開催するにあたって、まず19世紀半ば以降、アメリカの人類学者によって収集され、ワシントンやブルックリンなどの博物館に保管されているアイヌコレクションの調査が始められた。この特別展は、これらのコレクションとともに、現在北海道在住のアイヌの方々の協力があってはじめて実現しえたものである。

アイヌの展示というと一般に2つの方法に分けられる。1つは伝統的なアイヌの歴史や文化を捉えたもの、もう1つは現代のアイヌの芸術に焦点をあてたものである。

今回の展示では、この２つの側面をあわせて展示した。それによってアイヌがどのような歴史や文化を持ち、今どのように発展していっているのかを提示することができた。

■チューネル　M.　タクサミ氏

「環太平洋地域からみたアイヌ文化」

アイヌは北海道や千島列島、サハリンやアムール川流域にまで進出し、各地において歴史を築いてきた。13世紀にはニブフの祖先やアイヌなどがサハリンやアムールの地で生活していた。アイヌのある者はニブフに同化し、またある者は別の独立した氏族として生活していた。こうしてアイヌは近隣に居住する民族集団の文化要素と多くの共通性を持つにいたったと考えられる。

私が主に研究しているニブフの文化要素と比較しても数多くの類似がある。例えば、銛（もり）などの海獣狩猟具や装飾、入れ墨の文様についても多くの類似性がある。また、海獣の肉や皮の使い方も類似しており、アザラシの皮は服に、胃袋や膀胱（ぼうこう）は油をためる袋に使われていた。

熊を送る儀礼にも共通性がある。熊送りには「狩り熊型」と「飼い熊型」の送り儀礼があり、アイヌとニブフの儀礼は「飼い熊型」である。この熊送り儀礼は複雑な行程から成り立っており、儀礼の中に伝承や歌、木彫の技術、ダンス、氏族の団結のあり方など多くの文化要素が含まれる。

現在、アイヌの資料は世界中の博物館で保存され、調査研究に使われている。しかしそれに比べてニブフの資料の保存状態は良いとはいえない。アイヌやニブフをはじめ北方の諸民族は長い間の文化接触を繰り返しながら、多くの文化的共通性をもった歴史を築いてきた。文化接触は複雑な過程を経て行われるものであり、今後の課題はこの複雑な過程をより深く考察していくことにある。そのためにも資料の保存は今後の重要な問題である。

（学芸課　角　達之助）

写真展「渡鴉（ワタリガラス）のアーチ」

平成14年11月1日（金）～14日（木）　　特別展示室　無料

北太平洋沿岸地域は、今から１万数千年前に人類がアジアから北アメリカへ移動した経路にあたり、両大陸間の文化的接点となってきました。たとえばワタリガラス神話に象徴されるように、この地域には共通する文化が認められるものの、寒冷な厳しい自然環境ゆえに、それが外部の世界に知られる機会は多くありませんでした。

本写真展では、一世紀という時間を隔ててカメラがとらえた北太平洋沿岸地域の人と自然を紹介しました。以下に概要を記します。

渡鴉（ワタリガラス）の神話

ワタリガラスはカラス類のなかでは最大で、翼をひろげるとおよそ120 cmにもなります。北半球北部にひろく見られ、日本では冬季に北海道東部に少数渡来します。カムチャツカ半島から北アメリカ北西沿岸にかけての先住民の間では、ワタリガラスを主人公とする神話が数多く伝承されており、天地を創った、あるいは複数あった太陽を射落として一つにした創造神として、またいっぽうで愚者・滑稽（こっけい）者・破壊者などとしても登場します。

この神話の分布をつなぐと、ちょうど北太平洋に沿って人びとの足跡を示すアーチのようにも見えます。最初の部分では、星野氏の写真と文章により、ワタリガラスについて紹介しました。

ジェサップ北太平洋調査と100年前の写真

ジェサップ北太平洋調査（Jesup North Pacific Expedition）は、「アメリカ人類学の父」と称されるF.ボアズがアメリカ先住民の歴史を解明するために組織し、1897～1902年にアメリカ自然史博物館（在ニューヨーク）の事業として実施されたものです。調査範囲は、北アメリカのコロンビア川以北からアジア側はアムール川以北までの環北太平洋地域で、主な出資者でもあった当時の同館理事長M.ジェサップの名が冠されています。

この調査には多くの研究者が参画し、なかでもロシアから参加したW. ボゴラス、W. ヨヘルソンは北東シベリアの調査で中心的な役割を果たしました。この両氏はそれぞれ、チュコト半島、カムチャツカ半島を中心に調査を行ない、詳細な民族誌をまとめあげるとともに、当時の様子を写真に残しました。本展では、同館に所蔵されている原板からプリントした34点を展示しました。

星野道夫氏の作品

星野道夫氏はアラスカに住み、その自然を中心に撮影を続けてきました。星野氏はつねづね、大学生の時に手にしたエスキモーの人びとの集落（北西アラスカ・シシュマレフ）の写真がきっかけで、アラスカに魅せられたと述べておられます。一夏をその村で過ごしたことが、後のアラスカにおける星野氏の生活の原点だったようです。

その後、ワタリガラス神話に関心をもった星野氏は、アラスカ先住民の足跡をたずねて北東シベリアでの撮影活動を始めました。さらに多くの作品を期待されていたところですが、1996年夏にカムチャツカでヒグマに襲われ生涯を終えました。当館ではその前年（1995年度）に友の会季刊誌『Arctic Circle（アークティック・サークル）』13、15～18号の表紙写真ならびにエッセイ「アングル北方発」に寄稿いただいたご縁がありました。今回は26点を展示、他界の一月前にチュコト半島で撮影された写真も公開しました。

本写真展は札幌で開かれた同名のシンポジウムに合わせ、北海道大学総合博物館で展示された後、当館で開催させていただいたものです。貴重な記録写真とともに、当館に縁のあった星野氏の作品を同時に展示することができ、同シンポジウム実行委員会、同館、ならびに星野道夫写真事務所、アメリカ自然史博物館の各関係者には、心から感謝したいと思います。

（学芸課　齋藤　玲子）

ミュージアム子どもフェスタ「やってみる・モンゴル」

平成14年11月3日（日）9:30-16:30 当館ロビー、講堂

北海道立の博物館・美術館では、子どもたちの博物館・美術館に対する興味・関心を高めることを目的として、小中学生やその父母を対象に「ミュージアム子どもフェスタ」事業をおこないました。当館では「モンゴル」をテーマとし、3つの体験型事業を実施しました。次にその概要を報告します。

【親子で建てよう！モンゴルの「ゲル」】

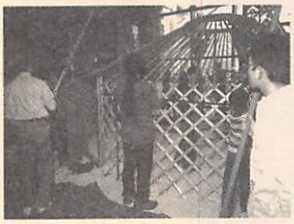
9:30-11:00

講師　西村幹也氏

（モンゴル情報紙「しゃがぁ」代表）

モンゴルのドーム型移動式住居「ゲル」の組み立て体験をおこないました。

まず、細長い板を格子状に組んだ壁材「ハナ」を5つ円く並べ、直径6mほどの円形の壁を作ります。次に柱の上に天窓を置いて円の中央に立て、天窓と壁の間に棒「オニ」を渡して屋根の部分を作ります。最後に壁と屋根の外側をフェルトで覆い、布のカバーをかけて完成です。



作業には親子合わせて40名ほどが参加しました。組み立てには思いのほか時間がかかってしまいましたが、完成したゲルのなかでくつろいだり、入口の前で記念撮影をするなど、参加した皆さんにモンゴルの雰囲気を感じていただけたと思います。

【アートセミナー・フェルトを作ってみよう】

11:00-12:00, 13:30-14:30

講師　古道谷朝生氏（網走市立美術館学芸員）

川原田悠子氏（草創会会員）

大友光枝氏、岡田由美子氏（両氏とも網走工芸友の会会員）

「ゲル」を建て、その覆いにつかわれているフェルトに触れたところで、フェルト作りを行いました。

フェルトは羊毛を圧縮して作ります。今回はただの布ではなく、石をくるんでペーパーウェイトを作ることにしました。

まず材料となる羊毛（カラフルに染色してあります）を、ちぎって縦に並べます。石をくるめるくらいの幅になったら、今度はそのうえに横向きに羊毛をちぎって並べます。この作業をもう一回くりかえしたところで（羊毛は四層になります）、中にいれる石をくるみます。この上に好みで文様となる羊毛を置きます。

次に、石鹸を溶かした湯をかけて、あとは手でなでつけるように強く押してゆくと羊毛がからみあい、縮んでフェルトになります。

比較的単純な作業でしたが、色の取り合わせや置き方には個性がでて、楽しい作品ができあがりました。

【草原を渡る風

―嵯峨治彦・馬頭琴と喉歌コンサート】

15:00-16:30

出演　嵯峨治彦氏（馬頭琴・喉歌奏者）

田中孝子氏（ギター、語りほか）

「ミュージアム子どもフェスタ」最後のイベントとして、完成したゲルの前で馬頭琴（ばとうきん）と喉歌（のど）のコンサートをおこないました。

馬頭琴による「ジョノン・ハル」などモンゴルの伝統曲やオリジナル曲の演奏、馬頭琴誕生の伝説として日本でもよく知られている「スーホの白い馬」の語り、口琴の即興演奏、喉歌のミニ講習会など盛りだくさんの内容でした。

コンサートのみの参加者を含め、定員を上回る大勢の方々に来場していただきましたが、馬頭琴の音色や出演者の楽しいお話に皆さん満足していただけたと思います。

（学芸課　中田　篤・笹倉いる美）

講座

「大草原の小さなゲル—現代モンゴルの多彩な姿—」

講師　西村幹也氏（モンゴル情報紙「しゃがぁ」代表）
　　嵯峨治彦氏（馬頭琴・喉歌奏者）

平成14年11月2日（土）　13:50-16:30 当館講堂

本講座では、モンゴルの多様な地域とそこで暮す人びとの日常生活や芸能文化について、二人の講師を招いて講演いただきました。次にその概要を紹介します。

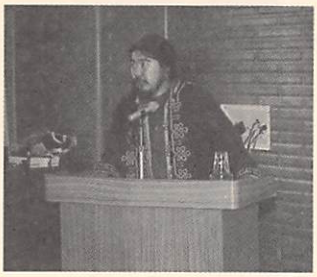
＊　＊　＊

■西村幹也氏「モンゴルの人とくらし」

モンゴルは平原の国というイメージが強いが、実際には丘陵、砂漠、森林などさまざまな環境がみられる。ここでは牧畜を主生業としている人びとの生活を中心に紹介する。

衣類はデールと呼ばれる民族衣装が中心で、形や色など地域ごとに特徴がみられる。住居はゲルと呼ばれるドーム型のもので、家畜とともに移動する生活に対応し、持ち運びしやすい造りになっている。重要な特徴はその「いい加減さ」（柔軟性）で、地面が多少傾いていても、部品が少し足りなくても建てることができる。

牧畜の対象となるのは、主に5種類の家畜（五畜）である。ウマは重要な移動手段で、ステータスシンボルでもある。ウシ（ヤク）は荷役・搾乳に、ラクダは荷役に利用される。ヒツジは主要な肉用家畜で、活動的なヤギと一緒に放牧される。



春から夏は「白い食物」（乳製品）、秋から冬は「赤い食物」（肉製品）が主に食される。一つの過程で次々にさまざまな乳製品を製造するのがモンゴルの特徴である。秋から冬には食用に家畜を屠殺する。モンゴルには伝統料理が少ないと言われるが、ヒツジを見事に捌く技術には、日本の刺身と同様のすばらしい食文化を感じる。

モンゴル国の首都ウランバートルは、全人口の約1/3が住む大都市である。近年、その利便性を求めて人びとが近郊に集まり、豊かな草原が空になるといった現象が増えており、今後のモンゴルの行く末が憂慮される。

■嵯峨治彦氏「ゴビと馬頭琴の旅」

馬頭琴は二弦の弦楽器である。台形の共鳴箱を棹が貫通する構造となっており、棹の上部にはさまざまなデザインのウマの頭が彫刻されている。本体は木製、弦は約100本の糸の束でできている。

モンゴル国と中国内蒙古自治区では、馬頭琴の形や材質に違いがある。例えば、モンゴル国ではウマの尾の毛を、内蒙古自治区では合成繊維を弦の材料としてもちいる。また、内蒙古自治区では、弦の調整をする糸巻きがギアになっているものもある。時代による変化もあり、元は皮張りだった表面部が現在は木製の板となり、チェロやバイオリンから取り入れたサウンドホールと呼ばれる穴が穿たれている。

馬頭琴との出会いは学生の頃だった。1997年に馬頭琴を入手し、ビデオを観たり、来日したモンゴル人演奏家に習ったりして演奏を覚えた。

昨年、ツアーの「添乗演奏員」としてモンゴルに行き、ウランバートルから南へ約400kmの地に住む馬頭琴演奏者・ネルグイ氏を訪ねた。

ネルグイ氏は、社会主義時代にプロとして活動し、民主化後は郷里に戻って家畜の世話をしながら馬頭琴を弾く演奏家である。夜にはツアー参加者や近所の人びとが集まって宴会になった。宴会ではネルグイ氏の馬頭琴による歌の伴奏や、馬頭琴の独奏、弾き語りなど、人びとの生活に密着する馬頭琴本来のあり方を体感することができた。

近年、日本でも馬頭琴を習う人が増えている。それほど難しくないので、ぜひ挑戦して欲しい。

＊　＊　＊

西村氏はスライド上映を、嵯峨氏は実際の演奏を交えての講演で、それぞれ参加者の皆さんにも楽しんでいただけた様子でした。

（学芸課　中田　篤）

今号の表紙 ― スキン・スクレイパー ―

厳寒の地域に住む人びとにとって、寒さから身を守るために衣類に気を配るのは当然のことである。衣類の素材としては陸獣類や海獣類の毛皮が利用された。それらの毛皮をコートや手袋、ブーツなどに加工するためには、手間暇かけて肉や脂肪をそぎ落とし、繊維をほぐして柔らかくなめした皮を作ることから始まる。

今号の表紙は2点ともイヌイトのスキン・スクレイパー（皮なめし具）である。毛皮から肉や脂肪をそぎ落とす「刃」の部分は２点とも石製で、柄はH4.35.2がシカ角製、H4.35.5が木製である。これらは遺跡からの出土品、あるいは遺跡周辺からの採集品であるが、柄の部材の保存状態の良さやその加工に鉄製品を使用した痕（こん）跡のあることから、18、19世紀頃の比較的新しいスクレイパーであると考えられる。この柄を片手で握り、刃を肉や脂肪の部分にあて、前に押し出すようにして掻（か）き取る。力のいる作業で、柄を強く握るため、柄の端は手が痛くならないように丸く加工されている。また、H4.35.5は、握りやすいように柄の基部が右側に曲がっており、手のひらの中心に基部先端があたるように作られている。

みんぞく　こうこ　はくぶつかん in　北海道

このコーナーでは、当館の活動に関連する分野の新聞記事のうち、道外ではあまり紹介されていない情報を掲載します。

10/1(火)　アイヌ文化と自然について考える「自然とアイヌ文化シンポジウム」が帯広百年記念館で開催／Y

10/8(火)-10/11(金)　「邪馬台国時代の東北・北海道蝦夷の原像」連載／D（夕）

10/11(金)　渡島管内松前町東山遺跡で隣り合った２基の縄文文化後期（3000-4000前）の環状列石（ストーンサークル）を発掘／D（夕）

11/2(土)　国の重要文化財に指定されている上ノ国町の、ニシン漁で栄えた旧笹浪家とその土蔵を復元／D（夕）

11/5(火)　上湧別町ふるさと館JRY（ジェリー）の入館者数が10万人突破／D

11/6(水)　カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州から先住民セクウェップムゥの2人を招き「カナダ先住民と開発」と題した講演会を開催、札幌市／D

12/11(水)　帯広カムイトウウポポ保存会がアイヌの古式舞踏を映像化／AS

※ AS:朝日新聞　D：北海道新聞　Y：読売新聞
複数紙掲載の場合は扱いが大きい方を紹介しています。

企画展　毛　皮 ― 身をまもる技と心 ―

寒冷な北方地域で生活するためには、動物の毛皮は不可欠です。たとえば、毛皮の衣類は寒さやけがなどから身体を保護するだけではなく、魔除けなどの意味も備えています。この企画展では、衣類を中心に、北方の先住民が毛皮をどのように利用してきたのか、その歴史や技術から精神世界までを概観します。また、近現代の北海道の毛皮利用や皮革製造技術についても紹介します。

期　間　平成15年2月4日（火）～3月23日（日）
休館日／月曜日　　観覧料／無料

News

■ 寄贈資料（10-12月）

・網走市の林幸夫氏からクマの毛皮1点が寄贈されました。
・遠軽町の鈴木安太郎氏からレリーフ1点が寄贈されました。
・札幌市の岡田淳子氏から北西海岸インディアンのボタンローブほか22点が寄贈されました。

■ 執筆者・出版社から贈呈を受けた書籍等（10-12月）

・William W. Fitzhugh 2002 *Gateways: Exploring the Legacy of the Jesup North Pacific Expendition 1897- 1902*: National Museum of Natural History, Smithsonian Institution
1999 *AINU:Spirit of a Northern People*: National Museum of Natural History, Smithsonian Institution
・文化出版局 2002 『銀花ーこどもの世界　大人たちの原風景を歩くー』129号　文化出版局
・Ч.М.ТАКСАМИ 2001 ПРИГЛАШАЕМ В КУНСТКАМЕРУ: Музея антропологии и Этнографии им. Петра Великого
・Henry Stewart/Keiichi Omura 2002 *Self-and Other-Images of Hunter-Gatherers*:Senri Ethnological Studies no.60:National Museum of Ethnology

■ 主な来館者（10-12月）

10/1(火)
(財) 日本私学教育研究所
　専任研究員　　綿引　弘氏
10/31(木)
アメリカ自然史博物館
　　バーバラ・マゼイ氏
12/19(木)
独立行政法人国立博物館
九州国立博物館(仮称)設立準備室
主任研究員　　藤田　励夫氏
　　松川　博一氏

■ 行事案内（1-3月）

1/18(土)博物館クラブ
　「太鼓をつくってみよう」
1/25(土)博物館クラブ
　「北方民族の家をつくる」
2/4(火)-3/23(日)
企画展「毛皮ー身をまもる技と心ー」
2/16(日)講座
　「レザーとファー
　　(革と毛皮の話)」
2/16(日)講習会
　「革で動物をつくろう」
3/1(土)博物館クラブ
　「かんじきで歩こう」
3/2(日)講習会
　「かんじきで歩こう」

■ その他の行事報告（10-12月）

12/27(金)ロビーコンサート2002　アリアとカンツォーネによる　青少年のための室内楽の夕べ

■ 観覧者動向（10-12月）

	常設展示	写真展 (11/1-11/14)
10月	2,323	
11月	788	528
12月	347	
計	3,458名	528名

■ 友の会会員募集中

北方民族博物館友の会会員を募集中です。友の会では季刊誌「Arctic Circle」や「友の会だより」をとおして北の文化を紹介しています。年会費は3000円です。すでに会員になられた方は、お知り合いの方にもご紹介下さい。詳しくはお問い合わせを。

北方民族博物館だより
—第　48　号—
2003年1月17日発行

編集・発行　北海道立北方民族博物館
〒093-0042　北海道網走市字潮見309-1
TEL 0152-45-3888　FAX 0152-45-3889
E-Mail : hoppohm@ohotuku26.or.jp
ホームページ: http://ohotuku26.or.jp/hoppohm/